島根定住考　㊥ Uターン

戻っておいでよ　島根

熱田糸帆さん（出雲市出身）

ゲストハウスに広がる笑顔
深まる絆 やりがいに

「住みたい場所で、やりたいことができている」―。出雲市の中心部、今市町にある扇町商店街の一角でゲストハウス「いとあん」を営む熱田糸帆さん(31)は、柔和な笑顔に充実感を漂わせる。

昨年10月にUターンし、昭和期に商人の宿として利用されていた旅館を活用し、宿に集う人と人、さらに地域との絆を深める場に生まれ変わらせた。

自身のつながりも、濃さを増す。声を掛けてくれる商店街の人たち。若者が煩わしいと言いがちな近所づきあいも「かわいがってもらっている」と喜ぶ。

宿泊者に伝えるため、出雲観光について学んだ際、従来よく知らなかった出雲大社の摂社や末社など、「心を落ち着かせてくれる」奥深い魅力を再発見した。

いつか帰りたい

出雲市内の高校を卒業後、「いつかは帰って自分で何かをやりたい」と漠然とした思いを抱きながら、東京都内の大学に進学。経済や金融を学ぶうち、利益最優先の考え方に「人が生活していくのに必要なものとかけ離れている。『衣食住』という生活の基本と、人との関係を楽しめる状況をつくる方が大切」と感じた。

思案を重ね、たどり着いたのがゲストハウスだった。安価で宿泊できるだけでなく、リビングなどの共同スペースや相部屋によって、旅行者同士の交流が自然と生まれる。気軽さが周辺地域、住民との敷居を低くし、雰囲気や暮らしぶりをより感じられるため、Iターンを検討する旅行者が泊まるケースも多い。

「地元のことをよく知っているオーナーが多く、いろんな人と話もできる」と魅力を語る、東京都文京区在住の高橋美帆さん(26)も、その一人。社会人になってから全国各地を一人旅し、「東京に住み続けないといけない理由はない」と考えるようになったという。「自分の好きな場所でやりたい仕事をしたい」との思いが募った。

今年7月には仕事を辞め、2011年に一人旅のデビューの地に選んだ出雲市を再訪。初めていとあんに宿泊し、熱田さんにIターンを検討していることを打ち明けた。

「いったん県外に出て、出雲の良さを再認識しているから話に説得力がある。U・Iターンへの知識も深く、相談して良かった」と、親身になってくれた対応を喜んだ。

理想とするIターンの適地は「2回、3回と行きたくなる土地」。ゲストハウスでの体験が、出雲を候補地の一つとさせた。

にぎわう食事会

いとあんを「自分のアンテナショップ」と表現する熱田さんの思いがかない、施設には笑顔があふれる。共有スペースでは、地元住民らを交え、料理を持ち寄った食事会も開き、会話に花が咲く。

同スペースは狭く、集まれる人数が限られるのがネックだったが、解消策として、扇町商店街の空き店舗の活用を構想。さらに、空き家の所有者と利用希望者を橋渡しし、地域課題の解消にも取り組む考えだ。

次々と湧くアイデアと、実現に向けたエネルギーの源は「自分が本当にやりたいことが分かったから」。追い求めてきた自身の生きがいづくりが、Iターン希望者の支援などを通し、ふるさとの再生につながり、うれしさが増す。

（熊谷美咲）

宿泊客や友人らが持ち寄った食事を囲みながら、会話に花を咲かせる熱田糸帆さん（中央）＝出雲市今市町、ゲストハウス「いとあん」

松井　保さん（大田市出身）

松江、大田に事業所開設
「心」にはいつも故郷

故郷の島根県内に事業拠点を開設し、約1年。ウェブサイト制作などを手掛ける日本ワイドコミュニケーションズ（東京都中央区）の松井保社長(40)は「いつか島根で雇用を生み出したい」との念願がかない、表情がほころぶ。自身は生活、仕事の軸足を都内に置くが、「心」は島根に定住。今後も、U・Iターンを希望する若者らの受け皿を広げ、貢献する。

大学進学で上京し、卒業後にリゾート開発会社で営業職に就いて2年目だった。出身地の大田市で製材所を営む父親が急逝。帰郷し、家業を手伝った。

一方で、当時は「バブル」と呼ばれたITの隆盛期。東京からは、次々と関連のベンチャー企業を立ち上げた仲間や知人の情報が伝わってきた。生き生きとした姿が目に浮かんだ。

「時代の波に乗りたい」―。高まる気持ちを抑えきれず、2002年に再び上京して起業した。何より、成功し、県内で雇用を創出したいとの思いがあった。夢を実現し「故郷を捨てたわけではない」ことを示すと、胸に刻んだ。

雇用創出が使命

当初は「明日の飯すら食えるか分からない」ほど、苦難の連続だったが、地道な営業と高い技術力で事業を拡大していった。現在はホームページの企画、制作、保守、データ解析などを一貫提供するワンストップサービスが活動。17年までには11人まで増やす計画だ。

一層の貢献誓う

開設に合わせて入社し、松江オフィスで働くITエンジニアの浅野利彦さん(31)＝大田市出身＝は、松江市出身の妻を連れてUターンした。松江高専を卒業後、東京都で10年間働いたが、通勤が片道1時間40分に及ぶ生活環境や今後の子育てを考え、決意した。何より、働く場所があったことが背中を押した。

今でも、ITに関する情報が豊富で、関係者のコミュニティー活動が充実した首都圏は魅力的な場所だ。その最先端の地と「島根にいながら、関わることができる日本ワイドコミュニケーションズの存在が決め手だった」と顧みる。

「県内外の企業とも連携し、外貨の獲得やU・Iターン者の雇用の受け皿のモデルとなるオフィスになれたらいい」―。郷里の活性化に向け、松井社長は一層意を強くしている。

（勝部浩文）

昨年9月に開設した松江オフィスで、社員と語らいながら仕事に当たる松江保社長（左端）。今後も雇用拡大を通し、故郷への貢献を目指す＝松江市学園南2丁目

データ

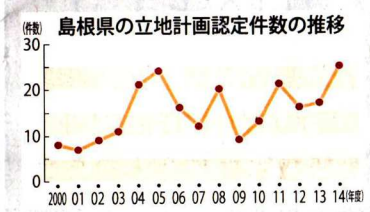
企業誘致に県も注力

定住の促進に欠かせないのが「働く場所」。島根県は企業誘致に力を注いでおり、県内に拠点を新増設する企業を対象にした立地認定件数は2014年度、過去最多の25件に達した。

内訳は、製造業14社、IT関連企業11社。県企業立地課によると、勤勉な県民性や、松江発のプログラミング言語「Ruby」を生かした産業振興策に魅力を感じ、投資を決断する経営者が多い。

県は税制や投資、雇用に対する助成制度などで各種の優遇措置を設けるほか、過疎地域の立地企業には助成率を加算する仕組みを導入し、後押ししている。

その結果、15年度もこれまでに12件を認定。引き続き、高水準を維持している。



地方創生へ